

メインタイトル	サブタイトル	情報年月日	概要	その他
発電機	仕様・発電量	2024.10.21	発電機サイズ・・・MSR、MINI（5m×3m×2m）小型なのでトラックでの輸送が可能。 仕組み・・・トリウム、塩素、フッ素を液体を自動的に補充。タービンを回して発電をする。（500℃～700℃） 発電量・・・MSR、MINI（1000kw～2.5万kw）の発電が同じサイズで作れる。 発電量1万kw／hの場合、24万kw／日の発電 小型の1000kwh／hの場合、2.4万kw／日の発電 2.5万kw／hの場合、60万kw／日の発電 1kwhコスト、3円／売価想定価格約8円（MSR／LEU60万kw、24h）1日－60万kw（耐久性、30年パーツ交換50年間）	（日本電気量 1kwh42円） 1kwhコスト 5円、激安！
	耐久・特徴		稼働30年(部品交換できれば50年程稼働可能)、廃棄物無し、プルトニウムの焼却が可能、安全（メルtdownが起きない・・・燃料が漏れるとガラスのように固まる）、長い送電線が不要で電気効率が良い	
	開発者		古川和男先生 後継者：(株)トリウムテックソリューション (TTS)代表取締役社長 古川雅章	
	特許関連		(株)TTSがノールウェイ・ハルデン研究所にて実験、2022年に世界特許取得：炉内でプルトニウムの消滅をさせることが証明された	
オファー			タイ王国、大企業、ギニア共和国、北海道リゾート、海上自衛隊、陸上自衛隊駐屯地（イギリス、台湾） インド NPO、ブラジル 国内工業団地	
原子力問題	状況		2011年3月に発生した東日本大震災の原発事故を受けて、全国原発50機が建設を中止しております。問題になっている国体保管プルトニウムの処理を実現する為、トリウム発電を活用し、安全、安心の世界を作る 原発と異なり、放射性廃棄物が少なく、逆にプルトニウムをトリウム発電内にて焼却できることが実験にて証明されています。	
	課題		1. 原子力発電（軽水炉）の現状 と問題点 メルtdown状態《軽水炉内において、電源が切れて水冷却不可能となり、H2O分解され、水素が発生。それが、炉の余熱で加熱して、水素爆発！そして、原料<ウランU235、U238>や廃棄物<プルトニウムPu>が放出されること》の過酷な事故が起きてしまうという軽水炉の問題が有ります。これに対して放射能の放出がなく、放射性廃棄物の発生量（最終残存量）が最小限で、エネルギーを低コストで生産できるものが求められています。 現在、原子力の最大の課題として、推進するにしても、反対し廃絶するにしても、使用済み核燃料（放射性廃棄物、プルトニウムPu）の後始末をどうするかという共通の課題があります。 具体的には、残されている放射能、すなわち溜まっている使用済み核燃料の始末であり、さらにまた福島原発の事故で炉心が溶けてしまった原子炉の廃棄（廃炉）をどのようにしていくかという課題です。 廃炉から出てくる多量の使用済み核燃料の問題は未来へ不安を残すものとなっています。 どの原子炉にせよ使用済みの核燃料中に溜まってしまったプルトニウムが核兵器への転用が可能な為、余剰プルトニウムの始末をどうするかという大きな課題があります。 * 現在日本には、プルトニウム残量が47トンあり、米国、ロシア、フランスに続いて世界第4位のプルトニウム積残大国です。（世界には原子炉600基、Pu500トンあり、日本はそのうちの約1/10）	